町議会行政視察研修報告

9月4日から6日の3日間、町議会の行政視察が行われ、北海道千歳市の「勇舞中学校」と北海道石狩郡当別町の「㈲大塚農場」の2箇所を行政視察いたしました。その視察研修の内容について報告します。

●北海道千歳市〔勇舞中学校〕

（総務文教常任委員会　副委員長　渡辺博文）

9月4日に視察した千歳市は、北海道の中南部に位置し、札幌市・苫小牧市等4市4町と隣接、順調な企業進出と人口増により、住み良い活力あるまちとして高い評価を受けています。人口は9万4831人（平成24年10月　住民基本台帳）、面積は594・95㎢です。

中山中学校改築という大事業を進めるにあたり、今年4月に開校したばかりの千歳市の「勇舞中学校」を視察しました。勇舞中学校は、既存の富岡中学校区内の生徒数が増加したことなどにより、分離新設による中学校建設を進めることになったもので、今年度の生徒数は13学級424名となっています。

▼「基本構想」策定の経過及び内容

保護者や学校関係者、町内会等の代表で構成する検討会議の報告書をもとに建設基本構想を策定し、建設の基本方針として次の6項目が掲げられました。

①安全性への考慮　②環境負荷の低減　③バリアフリー　④ライフサイクルコストの低減　⑤施設の長寿命化　⑥周辺環境への配慮

▼概要・規模・発注方法等

①総事業費　約29億6000万円
②構造　鉄筋コンクリート造　地上3階建（講堂棟は平屋）③敷地面積　3万3084・80㎡、グラウンド面積1万6474㎡　④建築面積　校舎棟2601・97㎡、講堂棟1519・42㎡　⑤発注方法　建物別、工種毎の14に分け、地元業者を優先して発注　⑥入札方法　予定価格に応じて、指名競争入札、事後審査型一般競争入札、制限付一般競争入札により実施

設計や建築にあたっては、校舎中央に見通しが良く自然光が入るライトコートを設置したり、機械設備は主熱源を環境性能の良い天然ガスを使用するなど、設計や建設にあたり考慮されていました。

また、図書室とコンピュータ教室を合わせたメディアセンター配置や図書コーナーの地域開放、校舎の外周を周回できる通路や災害時に簡易トイレを接続する管の設置等もなされています。太陽光発電により空調換気設備の動力が年間60％程度賄われていたり、教室への高効率蛍光灯、トイレへのLED照明採用による照明負荷の低減も図られています。

一方で、音楽室が3階にあったことから、楽器の搬入・搬出について聞いてみたところ、マリンバ等の大きな楽器は車椅子用のエレベーターに乗らないので、階段の昇り降りが非常に大変とのことでした。実際に校舎で活動する生徒の意見をもっと聴いていれば、こういう事態にはならなかったのではないかと感じました。

安全面では、職員玄関を含め昇降口をオートロックにしているほか、生徒玄関と駐車場を分けグラウンド出入口を設置し生徒と車の動線を分離したり、外の様子が一見できるよう職員室を2階に設置することにより、安全の確保を図っていました。

安全・安心・環境等を最大限に考え、生徒や周囲に配慮しているうえに、発注に関しては地元業者にも最大限に利益をもたらすように建設されており、中山中学校の改築にも参考となる点が多い実りある視察研修となりました。

●北海道当別町〔㈲大塚農場〕

（厚生産業常任委員会　副委員長　鎌上徹）

9月5日は、石狩郡当別町において、6次産業の視察を行いました。当別町は、石狩平野の北部に位置し札幌市に隣接、人口は1万8089人（平成24年10月　住民基本台帳）、面積は422・71㎢の田園都市です。

6次産業とは、農業の1次産業、食品加工の2次産業、流通販売の3次産業の1から3次までの産業を全て1つの経営体で行うことです。

今回の視察先は㈲大塚農場といい、従業員は社員5名（全員家族）とパートタイマー6名、臨時雇用者6名で構成されていました。

資本金300万円、年商8000万円で、経営面積は57ha（内訳は、水田15ha、小麦15ha、大豆15ha、小豆3ha、馬鈴薯2ha、人参1・5ha、南瓜1・5ha、トマト40a、亜麻2・5ha、キュウリ20a）となっています。

中山町の農家の経営耕地面積は平成22年で814haとなっていることから、大塚農場は中山町の約7％の耕地を耕作していることになります。やはり、北海道は規模が違うことを実感させられました。

大塚農場では、「美味しさと安心が幸せに」をモットーに栽培・販売活動を行っており、土づくりに重点を置き、土壌分析に基づいた適正な施肥や有機物の積極的な施用が行われていました。

6次産業への参入目的は、規格外農産物と不良在庫の有効利用、そして当別町特産の亜麻を使用した商品開発と販売のためということです。トマトジュース原料のトマトを冷凍保管したり、規格外のキュウリを漬け物製造に使用するなど、廃棄を削減して結果を出していました。最近は、余剰農産物の扱いが問題となっていますが、余剰農産物での加工品づくりにより無駄のない農産物販売を目指しているとのことでした。

また、農薬を使用せずに栽培した亜麻種子を低温で圧搾し、その亜麻仁油で作ったサプリメントの販売（現在は委託製造）などにも取り組んでいました。

さらに現在、融資制度と自己資金を合わせた約680万円で、試験的規模の加工開発の施設を整備しているところでした。

今後の取り組みとしては、米や小麦等の原料生産をメインにした新しい加工品開発にも力を入れ、資源の無駄をなくしバランスの良い事業を進めていきたいとのこと。今後の問題点や課題は、売り上げの約4割を占めている農協を通じたルートを守りつつ、道の駅やアウトレットパーク等の直販所での販売にも力を入れ、トマトやキュウリの加工製品製造を一緒に進められるパートナー企業や連携先を増やすことが目標ということです。

安心という点で、なるべく顔が見える生産者でいようという思いから、個人販売に努めている様子も伺うことができました。

今回の視察では、6次産業の魅力を感じることができましたが、商品の開発や、生産しても販路をしっかりしなければ商売につなげることが難しいのも事実です。

農家が1次産業にとどまらず、6次産業に進化させていこうと考えた時に、行政としてもバックアップしていかなければならないと感じました。